

第22回

ヨーロッパの主権国家

監修・講師
大久保桂子

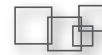
学習のねらい

西ヨーロッパでは、16世紀ごろから、それまでの封建制下の分権的な状態にかわって、主権者の下に統合される「国」が形成され始めた。それらの国のなりたち、範囲、構造、主権者のあり方（特定の王とはかぎらない）は、国によってさまざまである。今回は、「主権国家体制」を導いたウェストファリア条約前後から、17世紀に国としての自立性を確立してめざましい経済発展を遂げたオランダ、同じ時期に異なる体制の君主国として成長したフランスとイギリスをとりあげる。

- ・ <主権国家体制の成立>
 - ・ 主権国家 三十年戦争 ウェストファリア条約
- ・ <オランダの繁栄>
 - ・ スペイン帝国 ネーデルラント オランダ独立戦争
- ・ <フランスとイギリスの追い上げ>
 - ・ 絶対王政 立憲王政 重商主義

■ ■ ■ 主権国家体制の成立 ■ ■ ■

ヨーロッパに**主権国家体制**の形成を促したのは、1618～48年の三十年戦争である。この戦争は、ヨーロッパの主要な国々が参戦する大規模な国際戦争に発展し、参戦国は死力を尽くして自国の利益と権威を保全し、拡大しようとした。**三十年戦争**の終結に当たって結ばれた**ウェストファリア条約**は、各国の自立性を認め、相互に国内事情に関与しない国際関係（主権国家体制）の原則が成立した。ウェストファリア条約は、オランダとスイスの独立を認めたことでも知られる。



■ ■ オランダの繁栄 ■ ■

現在のオランダが位置する地域は、古くからネーデルラント（低地）とよばれ、北西ヨーロッパの経済中心地であった。16世紀半ばにネーデルラントはスペイン領となったが、スペインの強圧的な支配に抵抗して反乱が起き、独立戦争に発展した。独立戦争は80年におよび、1648年のウェストファリア条約で、北部**ネーデルラント**が「オランダ連邦共和国」として独立が認められた。独立戦争中から、オランダの経済発展はめざましく、アムステルダムをはじめとする商工業都市が発展し、ヨーロッパ最大の経済大国となった。商工業者がささえる都市社会では、独自の文化が開花した。

■ ■ フランスとイギリスの追い上げ ■ ■

オランダの急成長を追って、経済発展をめざして国の体制を整えていったのが、フランスとイギリスである。フランスは17世紀半ば以降、国王ルイ14世のもとで**絶対王政**を確立し、国内を安定させるとともに、貿易による利益で国を豊かにしようとする**重商主義**^{じゅうしょうしゅぎ}政策を推し進めていった。イギリスは、17世紀後半から積極的な重商主義政策を採り始め、17世紀末の名誉革命で立憲王政を確立した。

考えてみよう 調べてみよう

- 三十年戦争の参戦国を調べてみよう。
- オランダ東インド会社の交易活動を調べてみよう。
- ヴェルサイユ宮殿の宮廷での国王と貴族たちの暮らしぶりを調べてみよう。